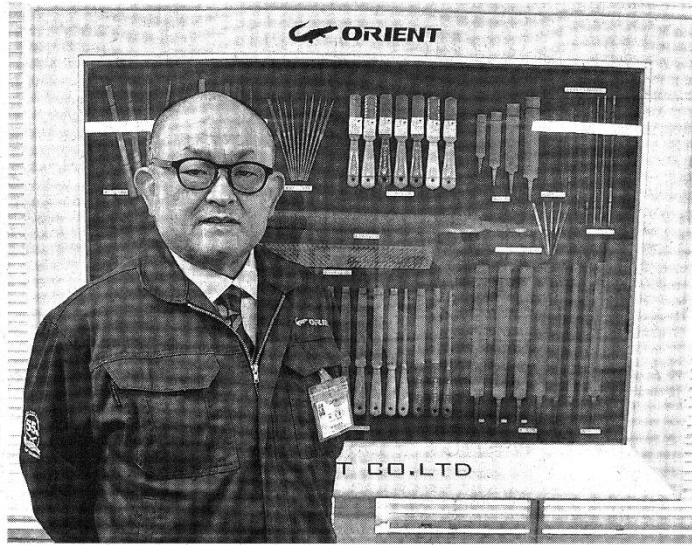


炭素繊維 削りながら磨く

削ったり磨いたりすることが難しい形状や入り組んだ場所も扱えるもの。やすりメーカーの国内きっての集積地・広島県呉市に、ひときわ異彩を放つ会社がある。オリエント。安い海外製に押されて会社の存続が危ぶまれる窮地からよみがえり、航空機などの部品加工用に独自にシート状の切削工具を開発。新市場を切りひらくと前を見据える。

オリエント (広島県呉市)

同社工場の一角に、シート状の切削工具「オムニシート」をつくる独自開発の加工機があった。研究開発を重ねてきただけに企業秘密。写真撮影はできなかった。



オリエントの林光彦社長。「メイドイン広島」を表す商標登録をして、製品に刻印するなど、広島県産のアピールに力を入れている。広島県呉市

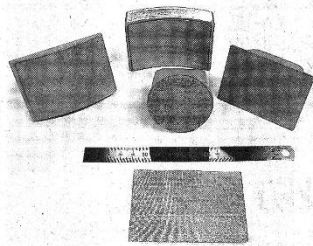
ちゅうぐくの

底力

航空機向け シート状工具開発

2016年度から今年度まで、高度な技術を使った中小企業の製品化などを支援する国の「戦略的基礎技術高度化支援事業」の採択を受けた研究開発で、「社運」をかけた製品だ。

用途は想像しづらいが、航空機や自動車など身近なものの加工に使われる。たとえば、航空機部品は燃費を高めるための軽量化や耐久性向上などのため、炭素繊維強化プラスチック(CFRP)が多く使われている。CFRPの仕上げには、紙やすりがよく使われているが、オムニシートなら紙やすりに比べて削れる量が3倍に、耐久性も15倍以上になるといふ。林光彦



オリエントが開発したオムニシート(下部) 同社提供

社長(56)は「炭素繊維を削りつつ、磨くことができるのが特長」と説明する。

薄いため、曲面に密着させることも簡単という。ロボットアームの先端に取り付けて切削すれば、作業の省人化にもつながるとみる。中国経済産業局の担当者も「今までになかった製品で、開発がうまくいけば、製造現場の生産性が上がる」と期待する。

創立は1963年。金融機関に移っていた林社長の父が地元に戻り、職人を集めて起業した。

やすりは呉の地場産業だ。海軍工廠があり、艦船などの製造にやすりが使われたことや、戦時の空襲被害が少なかったことなどもあり、仁方地区を中心に企業が集まっていた。

そこへ「新参者」(林社長)として飛び込んだ格好だが、海外市場にいち早く目を向け、米国のホームセンターに納品する様々なやすりを手がけた。国内でもホームセンター向け製品を拡充し、会社を成長させた。だが、80年代に入ると

流れが変わる。安い中国製品が台頭し、会社の業績も下がり始めた。

会社存続が危ぶまれる約6年前、大手スポーツメーカーに務めていた林社長は、家業を継ぐ腹づもりでオリエントに入った。

そして注目したのが、大手自動車部品メーカー向けの特殊なやすりを作っている技術力だった。「難削材を削る技術を生かせば、道が開けそうだ」

同社は昨年以降、オムニシートを名古屋や東京の見本市に出展し、製品や技術力をアピール。航空業界や自動車業界のメーカーから関心を持ってもらい、製品納入のメドがたちつつある。

いよいよ発売が4月に迫る。半年ほどサンプル品を出荷し、その後、量産化に向けた設備投資もする意向だ。「やすりから切削工具のメーカーへと脱皮する」と意気込む林社長。「ニッチでも絶対的な技術力のある企業となり、生き残っていく」

(近藤郷平)

オリエント 資本金3500万円。広島県呉市仁方地区に本社や工場がある。売上高は非公表。従業員数は約20人。同地区を中心に呉市には、ピーク時に120余りのやすりメーカーがあったが、今では1割ほどまでに減ったとされる。